

ある晴れた日の昼下り、彼は庭に据えられたハンモックでくつろいでいる。軒下にはツバメの巣が見える。

母鳥が卵を抱いているらしい。天敵から守ろうとする姿に心を打たれる。彼が母の胎内にいた頃も、このようであったのかもしれない。

自分の鼓動を聞きながら、母の鼓動を思い出そうとしたが、思い出せなかった。紐を引くと、ハンモックが揺れるようになっていく。何度か揺らしながら彼はまどろんでいく。

ツバメが巣立っていき、いつの間にか梅雨になった。

ときおり梅雨の中休みになり、彼はハンモックでくつろぐ。

読書すれば、揺り椅子ならぬ、ゆりかごの読書。

もうすぐ夏。日焼けに気を付けねばと思いつつながらまどろむ。

今年の夏は暑すぎた。彼は庭にパラソルも備えて、何とかハンモックでくつろいでいる。

薄着で過ごせるのは有難いが、汗がにじむ。

蝉しぐれを聞きながら、ゆりかごの読書を楽しんでいたら、いつしか虫の音に変わり、読書の秋になった。

「少年老いやすく学なりがたし」とつぶやきながら秋を歓迎している。